

ディケンズ『バーナビー・ラッジ』にみる19世紀イギリスの女看守

| | |
|----------|---|
| 著者 | 中田 元子 |
| 雑誌名 | 論叢：現代語・現代文化 |
| 号 | 13 |
| ページ | 1-15 |
| 発行年 | 2014-09-20 |
| その他のタイトル | A Female Turnkey in Dickens's Barnaby Rudge |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00123004 |

ディケンズ『バーナビー・ラッジ』にみる 19 世紀イギリスの女看守

中田 元子

はじめに

チャールズ・ディケンズの『バーナビー・ラッジ』(1841)で、鍵屋ヴァーデン家のメイドとして登場するミグズは、物語の最後でミドルセックス州監獄(Middlesex County Bridewell)の看守^{クーンキー}になったことが伝えられる。¹⁾

It chanced at that moment, that the justices of the peace for Middlesex proclaimed by public placard that they stood in need of a female turnkey for the County Bridewell, and appointed a day and hour for the inspection of candidates. Miss Miggs, attending at the time appointed, was instantly chosen and selected from one hundred and twenty-four competitors, and at once promoted to the office; which she held until her decease, more than thirty years afterwards, remaining single all that time. (*Barnaby Rudge* 684-85)

1780年に起こった反カトリックのゴードン暴動を扱ったこの作品の後半では、ドリーとエマの監禁が先触れとなつて、主人公バーナビー、その父ラッジのニューゲイト^{プリズン}監獄への収監、ニューゲイト他の監獄の焼き討ちと囚人脱獄、再びバーナビー、父ラッジ、ヒュー、デニスのニューゲイトへの収監、ゴードン卿のロンドン塔への収監と、監禁、牢獄の描写が続く。物語の最後で、ミグズが生活の場所を監獄とすることになるのは、まさに作品の流れに合致するもののように思われる。

ミグズが人生後半を監獄で過ごすことになるのは、それまでのミグズの振る舞いや発言からいって、読者にも納得のゆくものだろう。ミグズは、日頃から、ヴァーデン夫人の、夫に対する不満を助長し、夫婦仲を悪くするよう働きかけていた。また、みなからちやほやされるヴァーデンの娘ドリーを妬み、彼女に惹かれる男たちを憎む。そして、反カトリック運動に、寄付と集会出席という形で参加し、暴徒に抵抗する主人ヴァーデンの銃にビールを流し込んで使えなくする。挙げ句の果ては、騒動の終結後、図々しくヴァーデン家に舞い戻り、クビだとわかると悪口雑言を吐いて出て行く。このような振る舞いを見せられると、ミグズが、看守としてではあっても監獄という場所に入ることを、それまでの所業に対する罰とみなすことは容易である。

しかし、ミグズの立場に立ってきわめて現実的に考えると、監獄行きを罰とみなすのとはまったく別の見方もありうることに気付く。というのも、ミグズはヴァーデン家のメイドをクビになった後、30 年余りも監獄で看守の職を保ち、独身で生活し続けることができたからである。監獄がそれを可能にする場所だったとすれば、仕事場としてはかなり好ましい場と考えられる。ミグズが監獄で一生を終えることを象徴的な罰と読むことがこの作品の読みとして説得力のあるものだとしても、もし監獄がミグズにとって好ましい場所だったとすれば、そこで一生を終えるのは本望だったということになる。

本稿では、まず、ミグズが勤めた監獄の実態や女看守の仕事の実際を調べ、その職業が未婚女性にとってどのようなものでありえたかを検討する。ついで、ミグズという人物の看守としての適性について考察し、ミグズにとっての看守という職業の意味、ひいては本作品における女看守登場の意味を探る。

1. ミドルセックス州^{フライドウェル}監獄

ミグズが看守となったのは、ゴードン暴動の直後、1780 年であるが、このときの中^{カウンティ・フライドウェル}ミドルセックス州監獄は、ロンドン、クラーケンウェル地区にあったクラーケンウェル^{フライドウェル}監獄である。元の職場であるヴァーデンの鍵屋もクラーケンウェルにあったので、ミグズは眼と鼻の先にある全く違う場所に移ったということになる。

クラーケンウェル監獄は 1615 年から 16 年にかけて建設された古い監獄で、ミグズが就職する直前にあたる 1776 年に視察をした監獄改良家ジョン・ハワード (John Howard) によれば、その時点で修理不能なほど老朽化していた (186)。そのうえ、ハワードの訪問の直後、まさに 1780 年のゴードン暴動で破壊され、閉鎖に向けた動きは加速した。このため、後継となるミドルセックス州監獄の建設が計画され、1794 年、クラーケンウェル監獄から半マイルほど離れたところに新しい監獄が建設された。それがコールドバース・フィールズ^{フライドウェル}監獄である。この監獄が業務を開始したのをうけて、クラーケンウェル監獄は 1804 年に完全に閉鎖された (Storer 245)。

本論冒頭の引用によると、ミグズは「就職してから 30 年余り後に死ぬまで勤め続けた」ことになっているが、上記のクラーケンウェル監獄の消長と照らし合わせると、それは不可能であったということになる。つまり、1780 年にクラーケンウェル監獄に着任したとすると、勤務期間の途中の 1794 年から 1804 年の間のいずれかの時期に、コールドバース・フィールズ監獄に転勤したと考えなければならな

くなるからである。同じクラークンウェル内のごく近い場所への転勤ではあるが、同じ場所に勤務し続けたことを示す本文の記述からすると少し違和感がある。

では、半マイルといえども移動はせず、あくまで同じ場所に居続けた可能性はないのだろうか。これについては、次のように考えると可能となる。ミッグズの在職中に閉鎖されたクラークンウェル監獄と同じ敷地内には、クラークンウェル・ニュー・プリズンという監獄もあった。これは、17 世紀後半に、ニューゲイト監獄の混雑緩和のために、クラークンウェル監獄の隣に建てられた未決囚用の監獄である。ニューゲイトに対して「新しい」ため、ニュー・プリズンと名付けられた。ミッグズが、クラークンウェル監獄の閉鎖に伴って、隣接するニュー・プリズンに移れば、既決囚用の監獄 house of correction から未決囚用の監獄 house of detention へと、監獄の種類を変えることにはなるが、30 年余りにわたって同じ場所に居続けることは可能だった。

ここでの問題は、監獄の種類が変わることだが、実際には、監獄の種類をそれほど厳密に区別せずに利用されることもあったようだ。このため、政府の委員会では、監獄の種別が無視されて未決囚と既決囚が同じ監獄に混在していることがしばしば問題となっていた。² また、クラークンウェル ^{フライドウェル} 監獄 とクラークンウェル・ニュー・プリズンは、同じ場所にあることもあり、よく混同されていた。ディケンズが『バーナビー・ラッジ』を構想中の 1837 年、貴族院報告において、リッチモンド公 (Duke of Richmond) は、未決囚用の監獄であるクラークンウェル・ニュー・プリズンを “house of correction” として言及している (Barrow 211)。クラークンウェル ^{フライドウェル} 監獄 がその機能をコールドバース・フィールズ監獄に移してからすでに 40 年以上、完全に閉鎖されてから 30 年以上もたった時期のことである。リッチモンド公の発言は、この時代に、クラークンウェル・ニュー・プリズンが、その種類を問題にすることなく、単にクラークンウェルにある監獄として認識されていたことを示すものである。

ここまで、物語の歴史的年代を考えて、ミッグズが勤務した監獄を特定することを試みてきた。ここで視点を変えて、作品が発表された 1841 年の読者が、ミッグズが看守となった監獄としてどの監獄を思い浮かべたか、という点から考え直してみよう。1841 年の段階でミドルセックス州の bridewell すなわち house of correction として存在したのは、上述のような経緯でできたコールドバース・フィールズ ^{フライドウェル} 監獄 である。コールドバース・フィールズ監獄は、名前にクラークンウェルを冠するニュー・プリズンより規模が大きく、とくにロンドンの売春婦が収容される監獄として知られていた (Collins 68)。当時の読者は、ミッグズが「操の弱い」(685) 売春婦に対して意地の悪い仕打ちをしたという記述を読むとき、コールドバース・フィールズ監獄が物語の舞台となった 60 年前に実際にあったかどうかには頓着せ

ず、この監獄のことを思い浮かべたのではないだろうか。そしてまた、それをクラークンウェルにある監獄として認識し、結果的にニュー・プリズンと混同していたことも考えられる。しかし、読者にとって重要なのは、クラークンウェルという地域に、ミッグズが勤めるにふさわしい監獄があったことであり、そのことには何の疑問もなかったからこそ、ミッグズがクラークンウェルにある監獄に「就職してから30年余りに死ぬまで勤め続けた」という記述に違和感を持つことなく読むことができたのだろう。

2. 看守の仕事と待遇

監獄で、看守は日常的にどのような業務を行い、どのような光景を目にしていたのだろうか。ミッグズが監獄勤務を始めた18世紀後半から19世紀前半にかけて、監獄改革運動、監獄法施行などによって、監獄を取り巻く環境は変化し、とくにコールドバース・フィールズ監獄は、ディッケンズも親交のあった所長チェスタトン (G. L. Chesterton) によって大改革が行われた。³ したがって『バーナビー・ラッジ』の舞台の年代と、出版年代とでは、看守の待遇などにも大きな変化があったが、ここでは『バーナビー・ラッジ』の読者が、身近な知識からミッグズの職場や仕事を想像したと考え、この作品の執筆・出版年代の監獄の実態をみていくことにする。主としてコールドバース・フィールズ監獄についての英国議会調査報告書をもとにするが、必要に応じて他の監獄についての記録も参考にする。

まず、1837年の第2回監獄視察報告書に記録されたコールドバース・フィールズ監獄の日課をもとに、看守の一日を再現してみよう。起床の合図とともに、看守は獄房のドアの鍵を開け、廊下に立って、囚人が房ごとに一列になって仕事に行くのを監視する。コールドバースでは無言方式が敷かれていたので、無言の規則に違反する囚人を注意する。⁴ 囚人にまいはだ作り、あるいは踏み車をやらせている間に、看守は交代で朝食を摂りに行く。病人がいたり他の職務があつたりして、監視のための看守の人数が足りないことがよくあった。囚人が朝食に行く前に、前日の無言規則違反者を監獄所長に報告する。違反者は所長の前に出て罰を受ける。囚人が朝食中はその前に立って監視する。朝食が終わると、また一列に並ばせて、チャペルに連れて行く。礼拝開始後、獄房、作業場を見回って、掃除がしてあるか、残っている者、病人がいないかを確認する。礼拝後はまた行進して作業場に戻らせ、まいはだ作りと踏み車をさせる。昼食、夕食の前後も、列を作って移動させ、監視することの繰り返しである。就寝時刻がくると、点呼の上、獄房に入れて鍵を閉める。以上は男性看守の一日であるが、女性看守の仕事も大体同じとされている。女性棟

特有の問題として、常に異なる罪状の囚人の混在があり、無言方式を守らせるのが難しい傾向にある、とのことである（"Second Report" 78-79）。

トットヒル・フィールズ監獄については、1837 年の第 2 回監獄視察報告書に二人の女性看守の証言が記録されている。⁵ 一人目の看守は着任してから 7 ヶ月で、重罪人と売春婦の入所する棟を担当している。日中はほとんど仕事室で監督をする。一時間は中庭での運動（散歩）につきあう。また、一日おきに、夜の入所者の受け入れを担当する。トットヒル・フィールズ監獄も無言方式で管理されていたので、違反してしゃべったり笑ったりした囚人を報告する。夜は中庭から部屋の中で声がしないかに聞き耳を立てる。このような仕事内容を伝えている。もう一人の、2 年半勤めている看守は監獄内に住み込んでいる。この看守の観察では、入所する女たちは大体酔っぱらっており、中には男性看守に支えてもらわなければ歩けないような者もいる。できるだけしゃべらせないようにしているが、寝室ではひどい言葉で話しているのが聞こえる、と証言している（"Second Report" 108）。

無言方式導入後は、それを守らせることが看守の仕事の大きな部分を占めていたようである。コールドバース・フィールズの所長チェスタトンによれば、無言方式導入後、職員の仕事は一層きついものになった。少しでも看守の注意がそれると、囚人たちは沈黙を維持することができなくなるので、職員的大幅な増員が望まれる、と証言している（"Second Report" 91）。実際に看守が監視しなければならなかった人数はどのようなものだったかという、この調査の回答日のコールドバースの囚人数は、男囚 689 名、女囚 236 名であった（"Second Report" 95）。これに対し、男性看守は 30 人、女性看守は 8 人（"Second Report" 84）なので、全員が出勤していたとして、男子看守は一人当たり、23 人、女性看守の方は 30 人を監視しなければならなかった。欠勤者や、臨時に別の任務に従事しなければならない者がいたことを考えると、一人当たりの人数は日常的にこれより多かったということになる。

看守の仕事は、文字通り鍵を回して囚人を房から出し入れし、つきっきりで見張るというものであった。始終囚人のそばにいてことによって、危険にさらされることもあった。監獄報告書には監獄内での規則違反の一覧が付されているが、様に囚人間の暴力沙汰が報告されている（"Second Report" 144）。暴力の対象が監獄職員になることもあり、コールドバースでは、男性囚人が集団で看守にむかって物を投げて騒ぎになったこともある（"Sixth Report" 295）。トットヒル・フィールズ監獄では、入所時に大暴れして窓ガラスを 70 枚も割った女がいた（"Sixth Report" 272）。元々暴力行為で収監された者も多い監獄という場所柄、看守は囚人の暴力に遭う可能性もある危険な職業だった。また、いわゆる監獄熱、すなわち発疹チフス罹患の危険は看守にもあった。1838 年の第 3 回監獄視察報告書によると、トットヒル・フィールズ監獄内で発疹チフスが流行り、囚人の中に死者は出なかったもの

の、職員が二人も死亡したとのことである（“Third Report of the Inspectors” 51）。

看守の仕事が厳しいものであるため、いったんは看守を志しても、3ヶ月間の試用の段階で見切りを付けてしまう者が多い、とコールドバース・フィールズ監獄所長のチェスタンは述べている。

Many of those who come on trial, notwithstanding that the stipend is good, leave without engaging, upon finding the duties so arduous, and exposure to the weather in the yards and passages so very trying to their health. (“Second Report” 119)

また、この一年間で11人が辞めたとも報告されている。このとき看守は男女合わせて40人いたが、そのうちの11人が辞めたとなると離職率は高い。

しかし、上記チェスタンの言葉のうち「給料が良いにもかかわらず」という文句は目を引く。チェスタンからみると、仕事が大変とはいえ、給料はそれに見合ったものだったということになる。女性職員の給料も他の職種に比べて良いものだったのだろうか。また、その他の待遇がどのようなものだったのかについても確認してみたい。

1837年の女性看守の給料は、上級看守が週給1ポンド3シリング6ペンス、下級看守が週給1ポンド1シリングである。一年間の収入に直すと、それぞれ61ポンド2シリング、54ポンド12シリングになる。女性看守長は週給1ポンド5シリング（年65ポンド）である（“Second Report” 96）。これを他の職業と比較すると、たとえば、ミッグズの元の仕事であるメイドの場合、1841年3月4日の『タイムズ』紙求人欄では年12ポンドが提示されているので（*Times* Mar. 4, 1841:1）、下級看守でも実にこの4倍以上の年収を得ていたということになる。参考までに、ミドルクラス女性の仕事である通いのガヴァネスの給料をみると、年30ギニーほどであり（*Times* Jan. 7, 1841: 1）、上級看守の半分である。また、トットヒル・フィールズ監獄の1838年の報告書では、女性看守のうち二人は住所が監獄になっている。住み込みということになれば、食費と住居費が不要になりその分が給料に上乗せされている計算になる。看守の給料は、女性の職業の中では格段に良いものであったといえるだろう。

また、監獄職員の給料は、元から良いだけでなく、職務に見合っているかつねに注意が払われており、場合によっては値上げ勧告が出された。1843年1月10日付けの『タイムズ』紙法廷欄では、監獄職員の賃上げが決定されたことが伝えられている。レディング監獄では、入獄者が増えて職員の仕事が増えた。よって、給料も上げたいとの動議が出されて承認されたとのことである。記事には、所長以下、女

性看守に至るまで、各種監獄職員の値上げ金額も記載されている（“Prison Discipline” 7）。

看守の給料や待遇は良かったようだが、その安定性はどうだったのだろうか。良い給料でも短期間しか働けないのであれば総体的に良い職業とはいえない。この点では、雇用主が公的機関であったことで、職業としての安定度は高かったといえる。家事使用人は、雇用主の一存で、一ヶ月程度の予告期間だけを与えられてクビになることもあったが、それに比べればはるかに安定していたといえるだろう。監獄調査報告書には、不適格、職務怠慢によって、免職、退職となった職員が記載されているが（“Second Report” 84）、同じことをすれば他の職業においても同じ対応がなされただろうから特に厳しいとはいえない。

主人の一存で免職になることはないとして、また真面目に間違いを犯すことなく勤務したとして、いったい何歳まで働き続けることができたのだろうか。1841 年のトットヒル・フィールズ監獄の看守一覧をみると、女性看守の中には 66 歳という者もいる（“Sixth Report” 274）。看守に定年はなかったのだろうか。また、治る見込みのない病気で仕事ができなくなっても解雇されなかったのだろうか。このことについての事情を知る手がかりが、1841 年の監獄視察報告書の所見欄にある。ここで視察官のウィリアム・クロフォード（William Crawford）とホイットワース・ラッセル（Whitworth Russell）が「退職後、所長と教誨師には年金が支給されるが、他の職員には支給されない。このため、病気や老齢によって勤務に支障がでるようになって解雇しない習慣がある。この悪習を根絶するためには、早急に、一般職員にも年金が支給されるような法改正が必要である」（“Sixth Report” iii-iv）と指摘しているのである。先のトットヒル・フィールズ監獄の 66 歳の女性看守はまさにこの習慣の恩恵を被った例であろう。

ミグズは、20 歳過ぎで就職したとすると、30 余年勤めて、50 代半ばで亡くなったと考えられる。定年のない待遇を十分享受するにはもう少し長生きしたかったところかもしれないが、定年がなく、病気になっても解雇されないという安心感は十分味わっていただろう。ミグズは、看守になった後、死ぬまで職を追われることなく、独身女性として生計を立てることができた。もし看守として採用されなければ、どうなっていただろうか。ヴァーデンが「ミグズと結婚するような気遣いがあるだろうか」（69）と言うように、ミグズは結婚市場からは排除されており、ゴードン騒動の後居候していた唯一の肉親である姉の家も、甥に対して暴力を働いたために追い出されてしまった。就きうる仕事としては、ヴァーデンの家でしていたメイドなどの家事使用人があるが、もし運良く職にありつけたとしても、給料は安いうえ、いつクビになるかわからない。ゆくゆくは救貧院も目の前にちらついたかもしれない。就職先としての監獄は、仕事は厳しく、危険もあった。しかし、何より

も、給料が良いこと、また、大過なければ病気になっても死ぬまで勤め続けられたことは、自分の身ひとつで生きていかなければならない独身女性にとっては、この上もない好条件を備えていたといえる。

3. ミッグズの看守としての適性

ミッグズが看守として採用されたとき、応募者は124人もいたとされている。前節でみた待遇の良さを考えれば、これもあながちディケンズ流の誇張とばかりはいえないのかもしれない。では、ミッグズはなぜそのような高倍率をかいくぐって採用されたのだろうか。本節ではミッグズの看守としての資質について考える。

コールドバース・フィールズ監獄の所長チェスタトンは、良い看守の資質として、節制、時間厳守、機敏さ、忍耐強さ、誠実さ、冷静さ、勤勉さ、健康、堅実さ、用心深さ、規律正しさ、服従する態度が身に付いていることなどをあげ、さらに、まずまずの教育を受けていること、と付け加えている（"Second Report" 91）。このような資質のうち、ミッグズは何を備えていたのだろうか。面接官に好印象を与えたのはどのような点だったのだろうか。

まず、作中ミッグズが初めて登場する場面を見てみよう。

This Miggs was a tall young lady, very much addicted to pattens in private life; slender and shrewish, of a rather uncomfortable figure, and though not absolutely ill-looking, of a sharp and acid visage. (64)

ミッグズは背が高く痩せており、ヴァーデン家の徒弟タパティットに言わせれば「骨張っている」(82)。ヴァーデンの娘ドリーがふっくらとしているのとは好対照である。顔立ちについて語り手は、「必ずしも醜いというわけではないが」と書いているが、表情は体つき同様尖っている。ドリーの恋人ジョー・ウィレットにとっては、「ドリーの後でこの女を見ると、こんな女がこの世に存在していること、そもそもこの世に生まれてきたこと自体が、何とも説明のつかぬ悪ふざけのように思われた」(120)。男が女の魅力と考えるものを全く持たない存在で、しかも、その名は男を連想させるものでもあった。⁶

監獄の看守の面接試験で、面接官がミッグズを一目見てまず気づいたのは、このぎすぎすした体つきと表情であったはずだ。これは男性にとっては魅力のない特徴かもしれないが、この点は、家事使用人の場合と同様、雇用者の視点からは、欠点というよりはかえって好ましい特徴とみなされた可能性が高い。監獄職員の大多数

を占める男性や囚人の関心を引く心配がなく、前もって問題を回避できるからである。

面接試験であれば話をする必要がある。ひとたびミッグズが口を開くとだれでもすぐ気がつくのは、そのおしゃべりぶりである。ミッグズが登場する場面では必ず長広舌が披露される。ひがみ、妬み、追従、自己憐憫、開き直りが同居している、口を差し挟む隙もないほどのおしゃべりである。ヴァーデンがあてこすりの皮肉を言っても、さらに上を行く嫌みたっぷりの返答をする。ディケンズがゴードン暴動を描くにあたって参考にした歴史書を検討したバットとティロットソン (John Butt and Kathleen Tillotson) は、ディケンズはミッグズとタパティットを造形するヒントを、*Fanaticism and Treason* (1780) に登場する "female orators" や "the harmless apprentice" から得たのではないかとしている (86)。『バーナビー・ラッジ』の長靴亭で演説するのはタパティットだけだが、ミッグズの、話し出したら止まらない、誇張した表現に満ちた話しぶりをみると、声高に扇動演説をする人物がモデルになっているとしても納得がゆく。

ミッグズはおしゃべりだが話し方は慇懃無礼で、ドリーは、ミッグズの話しぶりが、表面は上品ぶっているが実は相手を馬鹿にしているという点で、礼儀正しいが無慈悲なチェスターに似ている、と感想をもらす (233)。ヴァーデン家などでの話しぶりから推測すると、ミッグズは、監獄の面接でも、聖書の文句を引用しながら、収監者の多くを占める売春婦を非難する一方、自らの貞節ぶりを大げさに自画自賛しただろうと想像できる。ミッグズは長広舌の途中、時々、単語を混同してマラブロピズムに陥ったり、聖書の引用も間違えたりする。⁷ しかし、コールドバース・フィールズ監獄所長チェスタトンが指摘しているように、看守の出身階級の中に教育を受けた者は少なく、とくに女性となるとごく少なかった ("Second Report" 91) とすれば、ミッグズの言語使用能力は応募者の中で際立っており、採用に大きく貢献したと考えられる。

もうひとつ、ミッグズに特徴的な点としてパテンズを好んでいることがあげられる。パテンズは、泥道を歩く時に、靴を履いた足を差し込んで用いられた西洋足駄である。鉄枠などで底が高くなっており、靴とスカートの裾が汚れないようにするためのものだった。このパテンズがミッグズの初登場時には彼女が常用しているものとしてわざわざ言及され、最後の登場場面でも目立つ持ち物となっている。さらには、ミッグズは、看守となってからもパテンズを履き続けたようで、その鉄枠で囚人の足を踏みつけたと伝えられる (685)。

ここで特に注目したいのは、ミッグズ最後の登場場面でのパテンズの働きである。ゴードン暴動が終結した後、ヴァーデン家に舞い戻ったミッグズは、「パテンズを、一対のシンバルのように打ち鳴らした」(668)。⁸ ミッグズは、再雇用を勝ち取ろう

と、追従をまくしたてながら、伴奏のようにパテンズの底を打ち合わせて鳴らした。金属でできていたパテンズの底を打ち合わせれば、確かにシンバルのように甲高い音がしたことだろう。ここでミッグズのパテンズが見立てられているシンバルは、元々オスマントルコ軍の軍楽隊メフテルの楽器だった。実は、メフテルはすでにこの物語に登場しており、しかも、そこでもミッグズと結びつけられていた。物語半ばの第41章、東ロンドン王立義勇軍の制服を着たヴァーデンは、妻に、「年甲斐もなくそんな格好をして」(339)、とたしなめられる。それに対してヴァーデンは、イングランド防衛の必要がある、として次のように言う。外国の軍隊がやってくると、「ミッグズだってだめだぞ。大きなターバンを巻いた真っ黒いタンバリンたたきの男がミッグズだってさらっていくぞ」(340)と。「大きなターバンを巻いた真っ黒いタンバリンたたきの男」は、まさにメフテルの一員である。ヴァーデンは心配しているが、ミッグズならシンバル叩きとしてメフテルの一員になることも考える。

ミッグズは、パテンズをシンバルのように打ち鳴らす姿をメフテルと同一視することができるばかりでなく、その他にも多くの暴力的傾向がみられる。まず、過激な言語表現を好む。「もし若き乙女たちが確実に自分を手本に倣ってくれるなら、男たちへの嫌がらせに、喜んで首を吊ることで、溺死するのでも、刃物を自らに突き立てるのでも、毒をあおることでもしてみせる」(64)という激しい表現はその一例である。自分の母についても「母は、一秒後に絞首刑にされ、八つ裂きにされると分かっている、この上もなく温和、友好、寛大、忍従の女だった」(188)などと言う。母については、重ねて、ボクシングの比喻も使って「カウントアウト寸前に明るい顔で立ち上がり、何もなかったように戦って勝利をつかむ」(188)と描写する。18世紀末から19世紀初めにかけてのボクシングは、素手で打ち合う危険なもので、選手が重傷を負ったり死亡したりすることがまれではないようなスポーツだった(松井 131)。ミッグズは言語表現において、ことさら暴力的な印象を与えるよう言葉を選んでいる。

ミッグズの言葉が暴力的であることは、「血まみれの英国」などというタイトルの記事を掲載していた反カトリック運動のパンフレットと軌を一にするものともいえるが、ミッグズは実際に身体的暴力を振るう。ゴードン暴動の後に舞い戻ったヴァーデン家で雇ってもらえないとわかったあと、姉の家に居候させてもらうが、甥に暴力を振るい、そこを永久追放となってしまう(684)。また、看守となっからは、囚人に対して、鍵の突起で囚人の腰の辺りをぎゅっと突いたり、パテンズで足を踏みつけるなど、隠微で意地の悪い暴力行為を働いた(685)。もっとも、看守というものが暴力的であることは周知の事実で、そもそも監獄ではむち打ちという名の暴力が懲罰として公式に認められていた("Second Report" 82)。看守と暴力の

結びつきを考えると、ミッグズの暴力的傾向は、彼女が元々看守としての性質を備えていたことを示すものとすらいえるだろう。

さらに、看守の仕事の中心である監視についていえば、これもミッグズはヴァーデン家にいたときから行っていた。とくに、心を寄せるタバティットの動きを注意深く見張っており、ある夜、タバティットが徒弟騎士団の集会に出かけるのを目撃した時は、看守の夜勤さながらに徹夜までして、タバティットが帰るのを待ち構えていた。

このように、ミッグズは、試験で採用されるに適した外見と言語能力をもっていたばかりか、採用された後行うことになる監視と暴力を塙の外でも予行演習のごとく行っていた。まさに看守にふさわしい人材であったといえる。

おわりに

本稿では、ミッグズの勤務場所の監獄の実態、看守の仕事の実際とミッグズの看守としての適性などを検討してきた。看守というのは、厳しい仕事ではあっても、女らしさを要求されない、暴力的であることがゆるされるなど、ミッグズには適した職業だった。行き場を失って進退きわまったともいえる時にこの職業を得たおかげで、ミッグズは一生独身で生きることができたのである。

それでは、結婚することなく働き続けて一生を全うする女性を登場させたこの作品は、女性が結婚せず自活することの可能性を肯定的に提示しているといえるだろうか。また、女性看守という職業が女性の就きうる仕事の一つとして認知されるような描き方をしているだろうか。

これらの問いには否と答えざるを得ない。まず最初の問題だが、物語の他の女性登場人物は、混乱の終息と軌を一にするように家庭に収まっていき、女性の居場所は家庭であること、結婚せずに生きる女性は例外的存在であることが確認されている。物語の前半でミッグズにけしかけられて夫を困らせていたヴァーデン夫人は改心して従順な妻になり、若い世代のドリーもエマも求婚されていた相手と結婚して多くの子供に恵まれることになっている。ミッグズは、ヴァーデンの家に騒ぎを引き起こし、自らは家庭の外に出て自活するが、女たちのなかにそれに続く動きの兆しはない。さらに、この作品において、ミッグズは女の範疇に入らないことが強調されているので、彼女が自活したとしても、それを女の自活とはみなしにくいこともある。

また、ミッグズは看守というまれな職業に就いたが、女性がその仕事をするものの利点を読者が感じられるかは疑問である。たとえば、女性の属性と考えられてい

た思いやりや優しさを監獄に持ち込み、監獄改良の一端でも担うことが暗示されているかというそのようなことは全くない。逆にミッグズの暴力的な振る舞いは監獄の残酷さを再認識させている。ミッグズの看守としての所業は、後日談として伝聞の形で報告されているので、暴力の深刻さは和らげられ、ミッグズを描くとき特有の滑稽さが加わっている。それでもミッグズの囚人いじめは、広く認識されていた監獄内での看守の暴虐ぶりと重なり、看守という職業の否定的性質を改めて認識させることにつながっただろう。

ただ、看守といういわば裏方の職業に、わざわざ固有名詞をもった人物がついていることには注目したい。ミッグズを含め女性看守は、囚人の多数を占めていた売春婦を監視する役割を担っていた。これは、数年後、ディケンズ自身が売春婦のための更正施設を作ったこととの関連を想起させる。ディケンズがその施設の運営にエネルギーを注いだことはよく知られているが、この尽力は、ディケンズが、自らが生み出したミッグズの暴力から売春婦を救うためだったとみなすこともできる。すなわち、ミッグズを看守にしたことには、監獄問題への人々の注意を喚起する意味合いがあったとみなすことができるのである。ミッグズは救貧院に入る運命に直面していた。しかし、だれも予想しない女看守となって生き続け、反感を買う人物として逆説的に看守問題への人々の関心を引く役割を果たしたといえる。

* 本稿は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部平成 24 年春季大会（2012 年 6 月 16 日、於早稲田大学）で、「看守になったミッグズ——未婚女性の働き口としての監獄」という題目で口頭発表した原稿を大幅に修正したものである。

¹ bridewell の名のつく監獄は、軽犯罪に対する有罪判決を受けた者を収容する house of correction をさし、重罪に対する有罪判決を受けた者用の監獄 convict prison とは区別された。また、未決囚の勾留施設（house of detention）はさらに別の種類の監獄である。ロンドンにおける bridewell の展開の経緯については、Shoemaker 第 7 章が詳しい。なお、本論文では、「監獄」という言葉を、広く牢獄全般を指すのに用いると同時に、特定の種類の監獄をさす場合にも用いる。監獄の種類・名称を特定して示したい場合は、クラークンウェル監獄^{ブライドウェル}のようにルビを付す。

² 1816 年の警察調査委員会報告書には、本来既決囚用の監獄である house of correction に未決囚が送られることについての証言が複数掲載されている（“Report from the Committee on the State of the Police” 59, 80, 110）。逆に、未決囚用の house of detention が house of correction の代わりに使われる可能性もあった。同じ警察調査委員会報告書では、未決囚勾留施設であるクラークンウェル・ニュー・ブリズンについて、既決囚は収容されていないのか、という質問がなされ、これに対して、同監獄最寄りのハットン・ガーデン警察署の治安判事は、覚えてい

る限りいないと思う、と証言した (55)。このような質問がなされること自体、未決囚用の拘留施設に既決囚が収容されることがあったことを示している。実際、ミッグズが看守になる直前にあたる 1779 年の議会報告書は、クラークンウェル・ニュー・ブリズンに 10 人の既決囚がいることを記録している ("Fourteenth" 307)。

3 ディケンズは『バーナビー・ラッジ』の構想中に二度、1837 年 6 月 27 日および 1840 年 8 月 25 日に、友人や挿絵画家（マクリーディ、フォスター、キャタモール、フィズ）と一緒に、コールドバース・フィールズ監獄を訪れている (Butt and Tillotson 79)。ディケンズはコールドバースの所長チェスタトンについて、その管理ぶりを賞賛し、後に売春婦の更生施設を作った時も収容者をチェスタトンから送ってもらうなどして交流が続いた (Collins 52)。

4 1830 年代半ば、イギリスの多くの監獄では無言方式^{サイレント・システム}（囚人が一堂に会して作業に従事するが、口をきいてはならないし、身振りや目配せなどによって意思を伝達することも禁止するやり方）が採用されていたが、政府は新しい監獄を作る場合は分離方式^{セパレート・システム}（囚人が顔を合わせないように独房に閉じ込めるやり方）にするよう勧告した。(Collins 142)。ディケンズは、分離方式は囚人の精神状態を悪くすること、費用がかかることなどを理由として反対し、無言方式を支持していた (Collins 146-50)。

5 トットヒル・フィールズ監獄 (City Gaol and House of Correction) は 1618 年にウェストミンスター寺院とミルバンクの間に建築されたあと、1834 年には、現在カトリックのウェストミンスター大聖堂がある場所に移転し、1884 年に閉鎖された。ディケンズは『バーナビー・ラッジ』執筆中の 1841 年 4 月 26 日と同年 5 月 19 日にこの監獄を訪問している。マスコミで "the Boy Jones" と呼ばれていた、三度バッキンガム宮殿に忍び込んだ 17 才の少年を見たかったからである。この少年は、初犯時は知的障害を理由に釈放されたが、その後の 2 回は、その理由が認められなかった。ただし、ディケンズは、訪問を仲介してくれたウェストミンスター高等執政官フランシス・スメドレーあての手紙で、「この少年が知的に正常であるという見方には強く疑いをもっている」と書いている (Letters, II 246)。この訪問はバーナビーの人物造形の参考にしたいとの思いから企画されたものと考えられる。

6 ゴードン卿は、反カトリック運動への基金者として読みあげられたミッグズの名を聞いて、「男かね？」(542) と尋ねている。

7 たとえば、refer と allude を混同して relude (343)、pronounce と denounce を混同して prenounce (524) という言葉を作っている。また pagan と言うべきところを Pigin (524) と言ったりしている。

8 この場面につけられたフィズの挿絵では、ミッグズはバテンズ一足分をまとめて左手に持っているが、本文では、両手にそれぞれ片方ずつ持っていると書かれている (667)。

引用文献

- Barrow, John Henry. *The Mirror of Parliament*. Vol. 1. London: Longman, 1838. *Google Books*. 1 June 2014.
- Butt, John and Kathleen Tillotson. *Dickens at Work*. London: Methuen, 1957.
- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. 3rd ed. New York: St. Martin's, 1994.
- Dickens, Charles. *Barnaby Rudge: A Tale of the Riots of 'Eighty*. 1841. London: Penguin, 2003. ---. *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House, Graham Storey and Kathleen

Tillotson. Vol. 2. Oxford: Clarendon, 1969.

"1835. Gaols, copies of all reports, and of schedules (B.) transmitted to the Secretary of State, pursuant to the 24th section of the 4th Geo. IV. cap. 64, and 14th section of the 5th Geo. cap. 12. (Counties, ridings, or divisions.)" 1836. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

Fanaticism and Treason: or, a Dispassionate History of the Rise, Progress, and Suppression of the Rebellious Insurrections in June 1780. By a Real Friend to Religion and to Britain. London, 1780. *Google Books*. 1 June 2014.

"Fourteenth Parliament of Great Britain: Fifth Session (26 November 1778 – 3 July 1779)" 1779. House of Commons Parliamentary Papers Online. 11 May 2014.

Howard, John. *The State of the Prisons in England and Wales*. London: Warrington, 1777. *Google Books*. 1 June 2014.

松井良明『近代スポーツの誕生』東京：講談社, 2000.

"Papers relating to The Cold Bath Fields Prison." 1808. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

"Prison Discipline." *Times*. 10 January 1843: 7.

"Report from the Committee on the State of the Police of the Metropolis: with the minute evidence taken before the committee; and an Appendix of Sundry Papers." 1816. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

"Report from the Select Committee on Metropolis Improvements; with the minutes of evidence and appendix." 1836. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

"Report from the Select Committee on Secondary Punishments: together with the minutes of evidence, an appendix, and index." 1831–32. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

"Reports and Schedules pursuant to Gaol Acts." 1825. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

"Second Report of the Inspectors Appointed under the Provisions of the Act 5 & 6 Will. IV. c. 38, to Visit the Different Prisons of Great Britain. I. Home District." 1837, Vol. XXXII. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

Shoemaker, Sidney Robert B. *Prosecution and Punishment: Petty Crime and the Law in London and Rural Middlesex, c. 1660–1725*. Cambridge: Cambridge UP, 1991.

"Sixth Report of the Inspectors Appointed under the Provisions of the Act 5 & 6 Will. IV. c. 38, to Visit the Different Prisons of Great Britain. I. Home District." 1841, Vol. XXV. House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.

Storer, J. and H. S. Storer. *History and Description of the Parish of Clerkenwell*. 1828. *Google Books*. 1 June 2014.

"Third Report from the Committee on the State of the Police of The Metropolis: with Minutes of the Evidence taken before the Committee; and an Appendix." 1818. 11 May 2014.

"Third Report of the Inspectors Appointed under the Provisions of the Act 5 & 6 Will. IV. c. 38, to Visit the Different Prisons of Great Britain. I. Home District." 1837–38, Vol. XXX.

House of Commons Parliamentary Papers Online. 1 June 2014.
Times. 7 January 1841; 4 March 1841.